④ 晴霞庵建立披露賀摺

椎の木ならぬ藤の一もとを頼み垣根
結添なとしていさゝかの庵をむすひぬ
かくて花とりに情をこらし梢の月峯の曙に
身をゆたねんとの心はへにはあらす只世の
業をわすれんとするのみなりはた何とか
名のなきにしもあらすと松窓の翁に額を
乞けれは絢を払て頓て晴霞の二字を得たり

菊植える迄をことしの出来こゝろ　多代女
十日〳〵の雨も長閑に　雨考
山水のみとりに鷺の道つけて　代
見ゆる限りをしるよしにせん　考
杯もはしめてすゝしくれの月　代
秋をよろこふ薄柿の衣　考

下略

老ても春はうれしく
飯蛸のめしより多し遊ふ事　松窗
うめ柳これは娵の田姑の田　且々
作寺や椿いくらの春を見し　きよ女
春はもののうれしき空に雪の散　太呂
はるの水十里流れて鶴見橋　夢南
海山のみとりにつゝけ我文も　芝山
蓋あけて広沢覗く田にし哉　梅價
寒いにもこゝろのよるや梅の花　碓令
とりついた意地にも似ぬや藤の華　金令

晴霞の夜遊
花の香や灯に手をかさす時　雨考
古池は持たてもきくやはつ蛙　旧葦
先うれしけふをはつ花初月夜　士篤
降雨のよるも冨けりきく蛙　淡水改　素龍

大熊川は目の果に白し
柴舟の来る水上のさくら哉　玩二
流れ来よ遠山さくらけふを専に　圓之

一樹を根こして
月に日に長かれとこの柳かな　蘭路

なこその石を贈りて
いつまても花さくこゝろさくら石　東翠

母の新荘にて
人の来る栞に蒔ん蔦の種　子介
人々を招て廿八夜も曙ちかき頃
朔日もまた来ぬ空をほとゝきす　多代女

文化戊寅春

⑤ 三人句摺

京に似ぬ山をはしめに京の花　大癡
さしのほす舟や桜の有かきり　桃児
筋違ふて花に茅花の散こゝろ　宜麦

⑥ 歳旦摺

楢橿に伸てのほれる初日哉
石川の音に戻れりおほろ月
子供等の中へ這入らん年忘

戊の年　七十四叟　宜麦